

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 20 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530954

研究課題名（和文）中学校国語科書写における書字過程に着目した行書教材及び授業開発

研究課題名（英文）Development of GYOSHO style teaching materials and lessons focusing on the writing motion in junior high school SHOSHA lessons

研究代表者

樋口 咲子（HIGUCHI SAKIKO）

千葉大学・教育学部・准教授

研究者番号：00431734

研究成果の概要（和文）：

本研究の研究成果は以下の4点である。一点目は、行書の書き方の課題解決法がわかる、書字動作に注目した資料集を作成したことである。二点目は、行書の書き方の課題解決法がわかる動画教材を作成したことである。三点目は、書字動作を理解しやすい行書規準文字（いわゆる手本）を提案したことである。四点目は、書字動作に注目した、行書の授業展開法を提案したことである。以上の研究成果により、課題解決学習の充実を目指した。

研究成果の概要（英文）：

The results of this study are the following four points. The first point is that I have created a book that focuses on the writing motion and helps students understand how to solve the problem of how to write in a GYOSHO style. The second point is that I have created the audiovisual materials to help students understand how to solve the problem of how to write in a GYOSHO style. The third point is that the proposed (so-called exemplars) GYOSHO style standard characters make it easy for students to understand the writing motion. The fourth point is that I have proposed a class expansion method of GYOSHO style that focuses on the writing motion. The results of the research as described above, aimed to enhance problem solving.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	400,000	120,000	520,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	300,000	90,000	390,000
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：書写書道教育

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：書字過程 行書教材

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初、本研究を推進しなければならない学術的背景は三点あった。一点目は、現場教師の毛筆実技、特に行書指導に対する苦手意識からくる書写授業未実施問題である。二点目は、平成20年3月に改訂された学習指導要領によって、書字動作に重点をお

いた書写指導の方向性が明確に打ち出され、この方面の研究が喫緊の課題となっていたことである。三点目は、硬筆筆記具を用いた書字動作に焦点を置く行書指導の研究の遅れである。

まず、一点目の書写授業未実施問題について述べたい。書写を実施していない中学校が

ニュースで取り上げられるようになったことを受けて、文部科学省で調査を行い、その結果が平成 19 年 2 月 28 日に各都道府県教育委員会委員長等宛に通知された。そこでは、私立中学の毛筆書写について、「いずれかの学年又は全学年でまだ実施しておらず、今後いずれかの学年で実施を予定していない学校数」が 11.3%にのぼることが明らかになった。公立中学では、毛筆書写を「全学年で既に実施している学校数」が 74.6%であり、「今後全学年で実施を予定している学校数」が 25.4%で、予定どおり行われれば、数字上では 100%完全実施となる。しかし、現場の声では、この調査が平成 18 年 12 月 20 日付けの通達による調査であり、例年行っていないがこの調査のために残り 3 学期で行うという事例があったという。また、毛筆書写を計画的に行うのではなく、書道展の作品づくりにあてたり、冬休みの宿題で書き初めを書いてくることで済ませたりしているという事例も多いという。こうした事態を受けて、書写・書道教育を推進している 6 団体（全日本書写書道教育研究会・全日本高等学校書道教育研究会・全国書道高等学校協議会・全国大学書写書道教育学会・日本教育大学協会全国書道教育部門・全国大学書道学会）が、国語を自らの手で確実に文字表現することの重要性を説くとともに、そのための毛筆書写の完全実施にむけた要望書を提出した。以上述べてきたような学習指導要領を無視した中学校毛筆書写の未実施の問題は、表面化していなかっただけで、長年問題視されてきた。現場で実施されない最大の原因は毛筆に対する苦手意識である。中学校の書写学習の中心は、学習経験が少ないとされる行書であり、現場での毛筆行書実技指導を支援する教材の開発は、喫緊の課題である。

次に、二点目の学習指導要領の動向について述べたい。平成 20 年 3 月に告示された小学校学習指導要領には、「筆圧などに注意して」・「穂先の動きと点画のつながりを意識して書く」の文言が盛り込まれている。当然中学校ではそのあり方を受けた指導を行わなくてはならない。ところで、学習指導要領中に毛筆の機能に言及した表現が登場するのは、戦後の学習指導要領ではじめてであり、毛筆学習の意義を明確にした画期的な学習指導要領となっている。現在我々が日常硬筆で書いている文字は、毛筆によって長年書かれ、形成されてきたものである。したがって、毛筆で文字を書くことにより、「とめ」・「はね」・「はらい」などの筆使いや運筆リズム（点画や部分形や一字全体において、書く速さの緩急や休止点がある）を理解しやすくなる。文字は、筆記具が紙面に接している部分が字形となってあらわれたものであるが、字形を整えるためには、紙面に接していない部分で

も、筆記具を適切に動かす必要がある。また、筆記具が紙面に接している部分でも、筆圧のかけかたに強弱があり、筆圧が強い部分はゆっくり書く場合が多く、筆圧が弱い部分は速く書く場合が多いなど、書く速さは一定ではなく、リズムがある。従来のように、書かれた結果としての字形の整え方の研究のみならず、書字過程についての研究を推進していく必要がある。

つづいて、三点目の硬筆で行書を書く場合の運筆法の研究の遅れについて述べたい。昭和 40 年頃から、硬筆と毛筆の関連指導の必要性が叫ばれ、研究も進められてきた。だが、研究の主体となったのは字形指導であった。毛筆大字教材で学習した部分形を含む文字を硬筆で多字数学習して部分形の記憶の定着を図る、という方法がとられている。行書指導においては、現場から、「生徒が書く行書がなかなか行書らしくならない。」という声が多くあがっていた。行書らしくならない原因は、字形だけ真似て筆脈・筆圧・運筆リズムといった書字動作を理解していないからである。適切な筆脈・筆圧・運筆リズムを理解した書き方を習得すれば、文字が書きやすくなり、字形を整えやすくなる。樋口は 2009 年度の実践的研究で、中学生が書いた行書を、字形と運筆（筆脈・筆圧・運筆リズム）という二つの視点から詳細に分析した結果、問題のある行書の書き方の 76%は運筆に問題があることがわかった。以上のように、硬筆による行書の運筆法の指導法研究は重要である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、中学校国語科書写教育において、書字過程に着目した行書教材および行書の授業を開発することである。具体的には、以下のとおりである。

- (1) 行書の書き方の課題解決法がわかる書字動作に注目した資料集の作成
- (2) 行書の書き方の課題解決法がわかる動画教材の作成
- (3) 書字動作を理解しやすい行書基準文字（いわゆる手本）の提案
- (4) 書字動作に注目した行書の授業展開法の提案

3. 研究の方法

上記の目的を達成するために、以下の方法で研究を進めた。

- (1) 行書の書き方の課題解決法がわかる書字動作に注目した資料集の作成にあたってまず、中学校国語科書写教科書を分析し、方向や形の変化・連続・省略・筆順の変化といった行書の特徴を複数含む教材文字を設定し、中学校国語科教諭を目指す学生や中学生

の実態書字を、同一文字で毛筆・硬筆それぞれ収集した。

つぎに、実態文字を類型化して問題点と課題を明確にし、具体的な課題解決法をまとめた。

(2) 行書の書き方の課題解決法がわかる動画教材の作成にあたって

①毛筆動画教材

中学校国語科教諭を目指す学生や中学生の行書の毛筆による運筆をビデオで撮影し、穂先の動きや筆圧のかけ方、運筆リズム等の書字動作を観察して分析した。かご字で示した行書のワークシート上に直接書くことによって、字形に気をとられることなく穂先の動きや筆圧のかけ方の実態を中心にとらえる分析も試みた。

②硬筆動画教材

毛筆と同様、中学校国語科教諭を目指す学生や中学生の行書の硬筆による運筆をビデオで撮影した。また、カーボン紙をワークシートの下に重ね、うつつた線の濃淡で、筆圧のかけ方を観察した。

以上の分析を受けて、具体的にどこをどう直したらよいか有効な改善法を考察し、指導上効果的な動画教材を開発していくようにした。

(3) 書字動作を理解しやすい行書基準文字(いわゆる手本)の提案にあたって

行書の書き方には幅があり、さまざまな書きぶりがある。中学校国語科書写の教科書の行書の字形を分析したうえで、中学校国語科教諭を目指す学生や中学生の書字実態をふまえ、部分形の系統だけでなく書字動作に注目した書きやすさの面を重視した規準文字を考えた。

(4) 書字動作に注目した行書の授業展開法の提案

開発した資料集や動画教材を使って教員養成課程の学生と授業を検討し、模擬授業や中学校での授業をとおして開発した授業の有効性を検証した。

4. 研究の成果

(1) 行書の書き方の課題解決法がわかる書字動作に注目した資料集の作成

①毛筆行書教材資料集

実態文字を観察・分析した結果、方向や形の変化・連続・省略・筆順の変化といった行書の特徴のうち、書字過程に注目すると、省略・筆順の変化は、方向や形の変化・連続の筆使いで字形が実現されるため、方向や形の変化・連続の筆遣いの学習を徹底すべきことがわかった。

行書の筆使いについて、学習者はうまくできていないことはわかっているが、自分の問

題点がどこにあるのかわからないまま、ただやみくもに練習を続けていることが多い。したがって、課題の設定ができず、問題解決もできない。また、指導者も、何がよくて何が悪いのか理解できていない場合、適切な指導・支援をすることができない。問題のある書き方を類型化して示すことにより、学習者は自己の課題がどのパターンに当てはまるかを捉え、問題解決法として具体的な運筆方法をイメージすることができる。

例えば、点画の方向や形の变化として教材設定されることが多い、右払いの終筆を横にすべらせる書き方は、試し書きでの達成率が低い。問題のある書き方のパターンとしては、終筆において穂先の向きが上向きのままで筆圧も同じままのもの、横ではなく右斜め下に滑らせるもの、横に滑らせる距離が短いものなどがある。これらがまず、課題の残る書き方であることを認識させ、どう筆を動かすと課題が解決できるかを解説した資料集を作成した。この資料集により、教師の指導・支援のつまづきを解消でき、学習者の課題解決学習も可能になる。

②硬筆行書教材資料集

行書学習において学習者は、行書を段階的に書けるようになることが明らかになっている(樋口「大学の教員養成における行書指導法の授業改善」2009)。すなわち、全く書けない段階から、筆脈・筆圧はよく理解できていないが字形を真似ている段階、筆脈・筆圧・運筆リズムを習得して、整った行書が書けるようになる段階である。従来の行書指導では、筆脈・筆圧はよく理解できていないが字形を真似ている段階に対応した指導がなされておらず、この段階で指導が終了してしまうため、日常生活で行書を使いこなすまで指導を徹底することができなかった。この学習段階に対応するため、硬筆による問題のある行書の書き方が一覧できる資料集を作成し、有効な改善法を提示した。

(2) 行書の書き方の課題解決法がわかる動画教材の作成

①毛筆動画教材

動画教材の作成にあたっては、穂先の向き・通り道がわかるよう、朱墨を含ませた筆の穂先に黒い墨を付けて書いた。適切な運筆で書いたものの他に、適切でない運筆で書いたものも示し、どこに問題があるかを解説し、改善方法も示した。

実態調査において、適切でない運筆例としてもっとも多い要因は、筆圧が十分にかかっていないことであった。縦画の始筆や右回転の転折部分も十分な筆圧がかかっていない実態が見てとれた。穂先よりも腰の部分を行き先させて運筆すべきところがそのように運

筆されていないかったり、穂先の通り道を明確に意識して書いたりしていない運筆も多かった。

小学校での既習書体である楷書と比較したとき、行書特有の形には、文字を速く書くための運動上の理由があり、なぜこの形になるのが理解できる見せ方も工夫した。紙面に対する垂直方向と水平方向とで、運動距離が短くなっているために速く書けることや、楷書よりも筆圧が弱いために速く書けることも理解できるよう、撮影角度も工夫して動画教材を制作した。また、筆が紙面から離れた後の筆脈の動きも見せるようにした。

小筆による運筆も動画教材化した。小筆の運筆は大筆と違い、小さな文字を書くため軽快に運筆する場合がある。大筆の運筆における筆圧の強さを、始筆・送筆・終筆の順に相対的な数値で捉えた場合、4・3・5となる。小筆では、3・4・5のように徐々に筆圧をかけていく運筆法がある。これら双方の運筆法を比較提示しながら動画教材を制作した。

筆ペンも、使い手の筆圧のかけ方によって、文字の書風が変わる筆記具である。始筆や転折で十分に筆圧をかけた適切な運筆と、そうでない運筆とを比較提示しながら動画教材を制作した。

②硬筆動画教材

本研究の最も独創的な点は、硬筆（鉛筆・フェルトペン・ボールペン）による行書の書字動作もわかりやすく映像化したことである。書写教育の目的は日常生活に生きる硬筆書写力を高めることである。従来の書写教育では、字形指導の点で、毛筆で学習したことを硬筆に活かすという硬筆・毛筆の関連指導が研究されてきたが、毛筆で習得した書写リズムを硬筆の適切な書写リズム習得に活かしていくという、動きの面での硬筆・毛筆の関連指導がなされてこなかった。映像では、筆圧をかける部分はゆっくり書き、筆圧をあまりかけない部分は速く書くといった運筆の緩急＝運筆リズムが理解できるようにした。また、実画（筆記具の先端が紙面に触れて字形として認識できる部分）だけでなく、虚画（筆記具の先端が紙面に触れていない空中での動き）＝筆脈も理解できるように、空中でもゆっくり筆記具を動かして示した。さらに、フェルトペンなど、使い手の筆圧のかけ方によって書きぶりが変わる筆記具もある。効果的に筆記具を使用している場合とそうでない場合とを対比して適切な運筆を理解できるよう工夫した。

(3) 書字動作を理解しやすい行書基準文字（いわゆる手本）の提案

平易な運筆で書字動作が理解しやすく、

同一構成部分を類型化した、読みやすい行書基準文字を提案した。パターンを理解すれば、生徒自身が、いわゆる手本が無くても行書が書けるようになるよう仕組んだ。

(4) 書字動作に注目した行書の授業展開法の提案

行書の特徴（点画の方向や形の変化・点画の連続・点画の省略・筆順の変化）別に適切な目標と教材を設定し、作成した資料や映像教材を活用した授業展開例を提案した。特に、目標に対する具体的なめあての立てかた、字形と運筆双方の評価の方法が、従来の行書指導では十分に研究されてこなかった。たとえば、「元」の二画目の横画の終筆と三画目の左払いの始筆を重ねて書く直接連続について指導するとき、連続さえしていればできたとすることが多い。具体的なめあてと評価基準を設定し、主体的に練習に取り組めるようにした。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

- ① 樋口咲子、硬筆書写指導内容研究の要件、書写書道教育研究、査読有、第27号、2013、107-110

〔図書〕（計5件）

- ① 全国大学書道学会編、樋口咲子他、光村図書出版株式会社、書の古典と理論、2013、175頁（120-122）
- ② 樋口咲子、光村教育図書出版株式会社、中学硬筆練習帳、2012、40頁
- ③ 樋口咲子、光村図書出版株式会社、中学校書写指導の方法、2012、96頁
- ④ 平形精一編著、樋口咲子他、萱原書房、文字文化と書写書道教育、2011、432頁（354-361）
- ⑤ 宮澤正明・樋口咲子、光村図書出版株式会社、行書ハンドブック、2011、20頁（共同で全頁に手本を執筆しているため担当部分抽出不可能）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

樋口 咲子 (HIGUCHI SAKIKO)
千葉大学・教育学部・准教授
研究者番号：00431734

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし